

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第二十一卷「人文科学（二の一）」

心理、精神、身体、生命および倫理、
道徳、人間学（二）
器質、認知、記憶、見当識

編纂、監修

岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第二十一巻を成し、岩崎の言語の著作のうち、器質、認知、記憶、見当識に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

第一部 器質性精神障害

第一章 精神医学的定義

第二章 精神医学的定義の概要

第三章 罹患者との個人的交流

第四章 「岩崎式日本語」にまつわる個人的交流

参考文献

物体の立ち現れ方

第三編 三十歳～三十九歳

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの

第九編 著作権者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳～二十九歳

第一部 器質性精神障害

二〇〇六年一月十七日 起筆

二〇〇六年二月十八日 公開

二〇一七年九月十一日 最終更新

特設サイト「精神病理学・精神疾患研究」

第一章 精神医学的定義

ICD-10 : F00-F09 症状性を含む器質性精神障害 (Organic, including symptomatic, mental disorders)

DSM-IV-TR : 2 せん妄、痴呆、健忘性障害、および他の認知障害 (Delirium, Dementia, and Amnesic and Other Cognitive Disorders)

DSM-IV-TR : 3 他に分類されない一般身体疾患による精神疾患 (Mental Disorders Due to a General Medical Condition Not Elsewhere Classified)

DiseasesDB 29283, MedlinePlus 000739, MeSH D003704 : 認知症 (痴呆) (Dementia)

DiseasesDB 29284, MedlinePlus 000740, eMedicine med/3006, MeSH D003693 : せん妄 (Delirium)

第二章 精神医学的定義の概要

器質性精神障害とは、脳や身体の明らかな病変によって生じる精神障害で、痴呆性疾患（認知症）やせん妄、頭部外傷後遺症などを含む。

認知症は、後天的な脳の器質的障害による知能の低下で、当然ながら昨今の高齢化社会において注目されている。

せん妄は、見当識障害を特徴とする意識混濁や幻視の様態を指す。アルツハイマー型認知症者、アルコール依存症者、大手術後の患者などに見られる。

ICD-10 の F06 群には、F20 群以降の各精神・人格・行動障害のうち、器質性である障害が列挙されている。明らかな脳や身体の損傷が原因である場合、これら器質性精神障害とされる。

第三章 罹患者との個人的交流

私の場合、精神疾患のうち、いじめ、虐待、性的暴行、人の死の目撃、災害の目撃などに対する心因反応（ストレス、ショック）に

よる自我の変容を主症状とするものへの関心が中心であるため、器質性、あるいは高齢化や外傷によって生じる精神疾患や知能低下については、それほど詳しいとは言えない。また、外傷によって精神障害に陥った知人は、現在のところいない。

しかしながら、心因性の解離性障害が器質性の若年の痴呆とされた例や、一時的なせん妄が解離性健忘であるとされた例などを見ているため、当然ながら注目していないわけではない。

むしろ、「人間は、心因反応によって器質性または外傷後の精神障害と同様の精神障害に陥ることが“できる”」ことのほうが見るべき点であると考ええる。すなわち、心因反応は、物理的な脳細胞などの破壊や化学的なホルモンバランスの変容と同様の物理的・化学的変化をもたらしている。

外科的手術が必要である脳や身体の損傷は、そもそも精神障害とは別に、手術によって是正してしかるべきものであるが、それを施したことによって精神障害が治癒するとは限らないことは、残念ながら執刀医に対する最大限の皮肉である。また逆に、脳卒中などによって言語機能・知能が失われた場合でも、数年経つともう片方の半球に言語野が形成されるなどして、言語機能が復活する場合があることに、人体の神秘を見る。

▼ 私がご相談を受けて交流してきた、精神・身体症状や共感覚、その他の特殊知覚・症状を持つ女性の皆様に、私のサイト内の女性専用スペースの管理・運営をしていただいております。また、これ

らの女性の皆様が入居者の多くを占める、シェアハウス型の女性寮に協力させていただいております。

女性に特有の症状・知覚については、女性スタッフおよび寮生に解説をお願いします。

← ● 「精神・身体症状、共感覚、その他の特殊知覚・症状の解説の分担などについて」を参照。

岩崎純一のウェブサイト 女性専用スペース

岩崎純一のウェブサイト
女性専用スペース
Women Only

第四章 「岩崎式日本語」にまつわる個人的交流

二〇一三年現在、器質性精神障害を持つ方は岩崎式日本語使用者

にはいない。

参考文献（精神疾患研究のトップページに挙げた文献以外）

- Calleo J, Stanley M (2008). "Anxiety Disorders in Later Life Differentiated Diagnosis and Treatment Strategies". *Psychiatric Times* 25 (8).
- Fadil, H., Borzanci, A., Haddou, E. A. B., Yahyaoui, M., Korniyhuk, E., Jaffe, S. L., Minagar, A. (2009). "Early Onset Dementia". *International Review of Neurobiology. International Review of Neurobiology* 84: 245-262.
- Newman, James K.; Slater, Christopher T. (editors) (2012). *Delirium : causes, diagnosis and treatment*. Hauppauge, N.Y.: Nova Science Publisher's, Inc.
- 下方浩史. 我が国の疫学統計. 日本臨床 増刊号 痴呆症学 2004;62 増刊号 4:121-125
- 朝田隆 厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業 若年性認知症の実態と基盤整備に関する研究 平成20年度 総括・分担研究報告書 二〇〇九

物体の立ち現れ方

二〇〇九年六月二十四日 起筆、攔筆、公開

先日、虹色協奏曲 BBS (<http://www.hidebbs.net/bbs/mamesyres>) で、あみさんという方からの興味深い書き込みがあつて、結局僕以外の人は答えなかったのだが、載せておく。（僕はこれを書き、突拍子もない質問とは思えず、「共感覚探究は認識論・存在論の探究でもある」という僕の考えにも通じる、素直な質問だと思った。）

（引用始め）

はじめまして あみ 【2009/06/07 14:46:39】

ちよっと気になることがあるので質問させて下さい。

数字や文字に色が見えるのは理解できるのですが、

何かほかのものが見えるひとはいらっしやいますか？

また物体そのものを見て別のものに見えるなど……

例えば、傘をみてなにか別の数字や色や音楽などといったものではなく

物そのものが見える方はいらっしやいますか？

Re:はじめまして 純一 【2009/06/07 19:12:56】

こんにちは。共感覚者で、かつ個人で在野にて共感覚を研究している者です。

おっしゃっているのは、例えば、「傘を見て帽子が見える」といったことですね。

それは「共感覚」の定義から外れますが、面白いので答えてみます。

基本的に、共感覚者としてホモ・サピエンスであり、赤外線が見える、超音波が聞こえる、といった、それこそ「超能力」に該当することは、できません。

「共感覚」は、あくまで「人間的な能力」です。

ですから、蝶やコウモリなどの他の動物になって、知覚世界の基盤が根こそぎ変更されない限り、人間が見ている或る物体が他の物体と知覚されることはないです。

それ以外の可能性としては、共感覚の話題からは外れますが、「霊が見えるか」などの問題になるでしょうね。

僕が交流してきた共感覚者には、確かに、ケンカしている二人が近付いたら、その中間に口短調の音楽が見える、などという感覚を持った人がいます。

ほとんど昔で言う巫女のような能力だと思えますが、それとて、「物体がすり替わって見えている」わけではありませんね。

ただ、僕がこれまでに三人ほど出会った共感覚者の女性なのですが、「物体の境界線」が分からない、という人はいます。

例えば、机の上に本が置いてあるとします。

一般の人は、「机」と「本」という名前を、それぞれに与えますよね。それが、いわゆる名詞の始まりです。

ところが、先の共感覚者女性は、例えば、机のうちの横に平らな上部（天板）と、本とを、まとめて「A」、机の残りの脚部分を「B」という名付け方をします。好きなように物体を区切るように指示したら、そういう分け方をします。

こういう方で、自力で社会生活を送れる方はほとんどいませんが、女性ですと、全体として「障害者」「自閉症者」と呼ばれる方が少ないために、自分の言葉でそういう知覚世界を言える方がいます。

「机」と「本」とを別の物体であると断定する根拠は、マイクロレベルでは証明のしようが無いと思います。組成は違っても、水素原子・炭素原子など（あるいは素粒子）同じものでできているわけですからね。（注：僕は、粒子という実在を信じているわけではありません。）

ですから、「一般の人にとっての或る物体が別の物体に見える」共感者には、今のところ出会ったことはないのですが、「物体の境界線が全く無い状態（前言語時代・幼児期）に戻る」、「自我と他の物体との境界線が分からない」といった共感者には、多く出会いました。

参考になれば幸いです。

（引用終わり）

分かりやすく書こうとしたので、僕が本当に言いたい、もっと深い東洋思想的な意味（実在は認識によって初めて実在になる、など）がこの文章だけで伝わるかどうかは別にして、一般の方が共感についてどういう疑問を持つかというのがよく分かって興味深い。

いわゆる「名詞」が与えられている物体について、全く別のものに知覚されるという共感者・自閉症者・知的障害者には今のところ会ったことはないが、人間（特に身内や知人・恋人）に対しては簡単に起こることが知られている。これは、コタール症候群とかカプグラ症候群とか言われるもので、「今私が付き合っている恋人は、恋人にそっくりな別人で、本当の恋人は、さつき歩いた道の、あの花になってるんだ」と思い込むなどする。稀に物体や抽象概念につ

いても起こる。

もつとも、これらは極端な例だが、同じように知覚されている物体・抽象概念・人間・動物であっても、「異なった立ち現れ方」「異なった意味付け」をしている、ということは言えるわけである。一般の日本人にとっての「帽子」と共感者にとっての「帽子」とは異なる物体である、ということは言えてしまうであろう。もっと言えば、物体の立ち現れ方は、人それぞれである。性別や民族が同じであれば、その違いが最小限に抑えられているから、言語というものが成り立つのである。

また、僕が調べた限りでは、男性では共感者の70%以上が、言語に支障のある自閉症者・知的障害者だから、「机」「本」「傘」「帽子」などを、生き物として認識している人もいるだろう。ここでは、「生命体」と「非生命体」の定義も、「西洋的健常者の主観が客観的である、人類の世界認識の普遍である、という幻想の持続」にすぎないことが浮き彫りになるであろう。

たとえ共感者や専門の共感研究者であっても、ここに挙げたような極端に前言語的・幼少期的な感性・症状を持つ共感者と交流している僕のような人には会ったことはないのだけれども、本当は、共感者を持っていないくとも西田幾多郎の「絶対矛盾的自己同一」や鈴木大拙の「即非の論理」を理解できる一般男性のほうが、僕が先

の返信で書いたことは理解できるだろう。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000182/files/1755.html>（絶対矛盾的

自己同一）※青空文庫より